

オーストロネシア諸語研究小史
 ——日本人言語学者の功績を中心に——

A perspective of Austronesian studies by Japanese researchers

崎山 理

Osamu Sakiyama

国立民族学博物館・滋賀県立大学

National Museum of Ethnology / University of Shiga Prefecture

Abstract: The earliest field-based information on Austronesian in Japan, a fragment of *Maleisch* (called in Dutch for Malay) has been recorded by Chūryō Morishima in his *Kōmōzatsuwa* ‘A Small Talk on Hollander’ published in Osaka in 1787, in the middle of the Edo period. Data might have been acquired from Malay speaking sailors of a Dutch sailing vessel anchored in Nagasaki. However, we still have a century and a half to achieve a full-scale research of Austronesian. Austronesian studies in Japan is said to have started after the Japanese rule of Taiwan began in 1895 and Japan’s mandate in Micronesia from 1922. Research studies of the aboriginal languages of Taiwan were pioneered by N. Ogawa and E. Asai who taught at the Taihoku Imperial University founded in Taipei in 1928, and H. Izui of the Kyoto Imperial University who has carried out linguistic fieldwork investigations in main islands of Micronesia from 1938 to 1941 just before the World War II. This is increasingly active especially after the Second World War when the number of researchers becomes fairly large as a result of the last fifty years’ research. Their works submitted both within and outside Japan as D.Litt. or Ph.D. dissertations are considerable in number, however, are written mainly in Japanese inside the country, and they mostly cover the next regions: Taiwan, Philippines, Indonesia, Micronesia, New Caledonia, Vanuatu, Fiji and Tonga. Nevertheless, the study in Melanesia, including New Guinea and Solomon Islands lags behind both in Japan and abroad as well in spite of a large number of languages, chiefly owing to difficult conditions. Furthermore, little has been done for comparative studies apart from works such as S. Tsuchida’s Proto Tsouic of Taiwan, R. Kikusawa’s Ergativity of Proto Central Pacific and O. Sakiyama’s comparative Micronesian languages. After Austronesian first moved from Taiwan into the northern Philippines around B.C.2500, a branch of the Malayo-Polynesian was considered to have left for the Ryukyu-Japanese Archipelago and first settled in West Japan in the late Jomon period. In regards to the Austronesian elements within the formation of pre-Japanese and later Japanese, several Japanese comparatists like S. Murayama, Y. Itabashi, and O. Sakiyama insist that Japanese was formed through a mixture of Tungusic and Austronesian, taking into consideration vocabularies and grammatical devices such as affixes and particles after having extracted a set of phonemic correspondences. Austronesian features may be, according to N. Poppe and also to H. Izui, possibly due to underlying contributions. R. Blust’s negative view (2013) does not seem to be based on a thoroughgoing comparison. We pray do not become ‘Sour Grapes’!

Key words: Austronesian, Malayo-Polynesian, Pacific languages, comparative linguistics, Japanese genealogy, contrastive linguistics, sociolinguistics, linguistic anthropology, ELPR, NUSA

1. 黎明・揺籃期

日本史で最も古く注目されたオーストロネシア系言語は『大隅國風土記』逸文(和銅6 [713]年)の隼人の俗語「髪を梳くを久西良」「海中の洲を必志」であるが(それぞれ、マライ・ポリネシア祖語形*ka+*seru「櫛」、*(ka)pesik「砂粒」に由来するであろう)、資料として乏しすぎる。しかし、残存しない原本には「隼人語」の更なる記載があったと推定される。その後、江戸時代中期の森嶋中良『紅毛雑話』(天明7 [1787]年)にマレー語が記録されるまで一千年以上が経過した。これは長崎でオランダ船のマレー語を話す船員から得た情報である。その言語名「マレイス」はオランダ語(Maleisch)の呼称、また梵字に似た文字があるという。マレー語をアラビア文字(huruf jawi)で書くことはすでに行われていたしコーランもアラビア文字書きであるが、梵字に似ているとは思われない。例文には「人の立ち騒ぎてさうごうしき時、ヤガンマイマーイといふて制す」はJangan main-main.「遊ぶな、ふざけるな」、「手拭をサプターガン」はsapu tangan「手ぬぐい」、「椰子をカラッパア」はkelapa [kəlapa]「ココヤシ」などがあり、「手水壺をチューチイパンタ」はcuci pantatで口語「しり洗い」(文法的には「しりを洗え」という命令文)のこと。カナ表記ではアクセントのあるペナルト‘paroxytone’を長母音(促音)で記し発音フォームは良く捉えられている。ja [dʒa]をヤと聞いたのはオランダ語訛りであろう。語中の-nga- [ŋa]を-ンガ-でなく-ガ-と書いたのは森嶋が江戸生まれで語中鼻濁音に違和感がなかったためと考えられる。

このようなわずかな情報を残したまま鎖国が継続するなか、さらにその後一世紀以上、南方の言語への関心は封印されてしまう。『紅毛雑話』から百年後の1890年には、天佑丸のマイクロネシア貿易巡航に同行した井上彦三郎・鈴木經熟『南嶋巡航記』(1893)がマイクロネシアの島々のうち「マリヤナ、ヤップ、パラヲ、ポネピ」の各島の言語をカナ表記で採集している。しかし、本格的な言語研究が始まるのは二十世紀に入ってからである。二十世紀初頭の明治末期にはマレー語(Baba Malay)の会話書(楊1908)が刊行されているが、オランダ領東インドとの交流を知るうえで貴重である。官立の東京外国語学校に馬來語学科が創設されたのは、その後、1911年1月のことであった。

日本の外領であった台湾で台北帝大の浅井恵倫(1894-1969)は1927年から台湾諸語の調査をしており1935年には『原語による台湾高砂族伝説集』(共著)を刊行した。またYamiの研究(1936)でライデン大で学位を取得している。浅井はハンブルグ大で、後述するO. Dempwolffの教えも受けたという(村山・大林 1973)。なお、浅井の事績については土田(1984b)を参照。浅井の師にあたる小川尚義(1869-1947)も台湾諸語の研究者であるが、小川の蒐集したFavorlang (Bavuzá) 語彙集がLi (2003)、台湾諸語の比較語彙集がLi/Toyoshima (2006)により編集刊行され、また小川の論文集も復刻された(林 [Lin] 2012)。一方、仁平(1976)も

すでに小川論文をまとめている。なお、NihiraはBununの語彙集も刊行している（1988）。台湾総督府から出版された小川編の音声記号によるパイワン語（1930）、アタヤル語（1931）、アミ語（1933）の語彙集は現在もその資料的価値を失わない。また小川・浅井の未整理資料が分類、整理された（土田〔代表〕2005）。小川とほぼ同時期の人類学者、伊能嘉矩（かのり）（1867-1925）の原住民諸言語（蕃語）の手書きノートを森口（1998）が整理、出版した。なお、日本人の台湾諸語研究についてLi（2007）が編年的に2006年までの研究を紹介している。

音声資料として、細菌学者の北里柴三郎とは従兄弟になる古代日本語研究家、北里闌（たけし）（1870-1960）が1921年から数年かけ現地に赴き録音した台湾、ボルネオ、フィリピンのオーストロネシア系言語の臓管資料がアイヌ語ほかの言語とともに文部科学省の科学研究費補助金（1986-1987）によるプロジェクトで音声復元されたが、その詳細はオンライン（<http://www.rikasuki.jp/memorial/hiwa/Japanese/takeshi/report24.html>）を参照。

1922年から南洋庁が置かれた内南洋（ミクロネシア）には京大の泉井久之助（1905-1983）が1938年から1941年まで三度にわたり言語調査に赴いている。また1942-1943年には仏印（インドシナ半島）でチャム語ほかの言語調査も行っている。すでにドイツ学術調査隊によるミクロネシアの各島嶼の総合的調査（1908-1910）が行われ報告書も刊行されていたが、言語の調査は不十分で首をかしげさせるものばかり、と泉井は言う。泉井のフィールドワークの成果の一部は論文集（1975）にも収められている。

2. 開花・発展期

浅井は1960-1964年、南山大で教鞭をとったが、その院生からサモア語の小田（2000）、MalagasyのKurokawa（1985）が育った。また浅井と直接子弟関係にはないが、台湾でフィールドワークを行ったTsuchidaはイェール大のI. Dyen（1913-2008）のもとでProto-Tsouicの研究（1976）によりPh.D.を取得している。土田は1988-1994年、東大人文学部研究科（後に人文社会系研究科と改称）教授として在任したが、退職後、オーストロネシア諸語とくに台湾諸語の研究者が輩出したことは土田の余勢と無縁ではなからう。『東京大学言語学論集』（*TULIP*）の土田のFestschriftには博士課程単位取得の野島（1995）がBunun、Kikusawa（1995）がFijian Kadavu方言（メラネシア）の海生動物名、フィールドで土田と知己のYamada（1995a）はItbayat（フィリピン）、Moriguchi（1995）はBununの研究を寄稿している。またYamadaは2014年、Itbayatの包括的な記述を刊行した。Kikusawaは博士課程中退後、ハワイ大で2000年、Ph.D.を取得しFijianを含む中部太平洋諸語の能格研究はオーストラリア国立大で刊行された（2002）。その後、同研究科に提出された学位論文（文学）にはバンティック語（スラウエシ）の内海（2005）、スンバワ語（ヌサトゥンガラ）の塩原（2006）、セデック語（台湾）の月田

(2009)、オロエ語（ニューカレドニア）の辻（2011）などがある。またNagayaは東大修士課程を修了、Lamaholot（ヌサトゥンガラ）の研究でライス大で2012年、Ph.D.を取得した。近年はImanishi（2009, 2010）のAmis（台湾）の研究がある。

ハワイ大ではすでにOda（1977）がチューク諸語（Ponapeic-Trukic）のPulo Annian（ミクロネシア）の記述、Sugita（1987）がTrukese（ミクロネシア）の所有表現でPh.D.を取得している。またGoodenough/Sugitaは新しい正書法の策定を伴うTrukeseの辞書（1980, 1990）を刊行した。東京女子大のOsumiはTinrin（ニューカレドニア）の研究で1990年オーストラリア国立大でPh.D.を取得し、論文はハワイ大出版会（1995）から刊行された。またOsumiの指導を受けたSatoはハワイ大で2013年、Kove（パプアニューギニア）の記述でPh.D.を取得した。

国内ではそのほか、東京外大アジア・アフリカ言語文化研究所（ILCAA）でShintaniがPaïta（ニューカレドニア）の文法と辞書（En collab., 1990）を出しているほか、チャム諸語（Malayo-Chamic）のラデ語（ヴェトナム）の対照語彙集（新谷 1981）を作成している。東京外大総合国際学研究科では鶴沢（2007）がマレーシア語の文型、原（2008）がバリにおけるバリ語とインドネシア語のコード混在で博士（学術）を取得した。またNomotoは東京外大修士課程終了後、ミネソタ大で類別詞の対照研究で2013年Ph.D.を取得したが、マレーシア語研究が中心である（2013）。東京外大出身のMiyakeは1999年、ミシガン大でPh.D.を取得したが、その後、博論のテーマと異なるJavanese（ジャワ）の研究を多く発表している（2011, 2014）。Nishiyamaもコーネル大で1998年Ph.D.を取得したが、Lamaholotの文法（Collab., 2007）を刊行した。東北大国際文化研究科ではKitano（2008）がKapampangan（フィリピン）の能格性と他動性で博士（国際文化）を取得した。奈良女子大出身のMatsumotoはパラオ共和国における言語接触と変化で2001年、エセックス大でPh.D.を取得している。京都産大外国語学研究科を修了したTsukamotoはトンガ（ポリネシア）の離島の少数話者言語Niuafu'ouanの研究（1988）、YamaguchiはMamuju（スラウェシ）の系統的研究（1999）でそれぞれ、オーストラリア国立大、インドネシア・ハサヌディン大でPh.D.を取得した。またTsukamotoにはトンガ語・サモア語の狭間に置かれたNiuafu'ouanの言語状況の報告もある（1994）。名大博士課程中退の塩谷はポリネシア語（2007）、ハワイ語（2009）に関する論文がある。

東京女子大でOsumiの指導を受けた内藤はツツバ語（ヴァヌアツ）で2008年、京大人間・環境学研究科から博士（人間・環境学）を取得し、2011年(a)に京大出版会から刊行された。また京大文学研究科では稲垣がカドリ語（カリマンタン）の記述で2008年に学位を取得した。国立民俗学博物館を基盤機関とする総研大文化科学研究科ではスダ語（ジャワ）を通じた食文化の分析により阿良田（2005）が博士（学術）を取得した。崎山は京大大学院在籍中の1964-1966年、インドネシア社会福祉省シスワロカンタラ基金でインドネシア大・ガジャマダ大島嶼語学科に給費留学した。その後、インドネシア諸語に関する処女論文集（1974）を泉井の序文

を冠して上梓し、またミクロネシア、ニューギニア、マダガスカル、海南島などのオーストロネシア語族域にもフィールドを広げMicronesian languagesの比較歴史研究（2014）で京大文学研究科から学位を取得した。

3. 比較言語学上の諸問題

3.1. 峻別主義

言語間で多重対応がある場合、音韻環境によってその理由が説明できない場合、祖語音として再構成するという比較言語学上の要請がある。オーストロネシア語族の場合、Dyenがその急先鋒を行く研究者で、例えば、 $*y(=*R)$ は $*R_1$ から $*R_4$ まで区別される (Lg 29, 1953)。このようなDyenの峻別主義を泉井（1955b）は問題にし、音声学的に不安定な性質をもつ音韻に関するときこのような対応系列はさらに増え、 $*y$ は $*y_1$ から $*y_\infty$ に及ぶであろうと批判する。同様の批判は台湾諸語の比較から $*S$ に対し $*S_1$ から $*S_4$ を再構成するDyen (Lingua 14, 1965) に対しO.C. Dahl (Proto-Austronesian, 1976) が行っており、台湾諸語以外の言語を対応させるとさらにその系列が増え、このような峻別は規則性からは‘far from regular’だと指摘する。sも音声的に不安定な性質を帯びるからである。R. Blust (OL 19[1-2], 1980) は $*S$ がh, ゼロに変化するから歯擦音 (sibilant) でなかったという議論はむなししいと言う。 $*S$ の変化はsを含みその対応がh, ゼロにもなる。同様の変化と対応例は日本語にもあり、言語変種A, B, Cにおける、お母-さま>A.お母-さん：B.お母-はん：C.お母-ん、お嫁-さま>A.お嫁-さん：B.お嫁-はん：C.お嫁-はん、お日-さま>A.お日-さん：B.お日-さん：C.お日-さん、の対応は峻別主義に徹すれば「-さま」の祖語形にそれぞれ、 $*-s_1ama$, $*-s_2ama$, $*-s_3ama$ を指定しなければならない。しかし、このような再構成は音声と音韻の混乱に過ぎない。泉井もDahlも各言語が分化後に独自に行った変化を祖語音にその相違を持ち込むのはアナクロニズムとみなす。

3.2. 重層語

印欧語比較言語学の泰斗A. Meillet (*La méthode comparative*, 1925) も否定しているように泉井も混合語の存在は原則的に認めない。しかし、一般論として印欧語族を根拠に混合説を否定するだけでは言語の歴史的動態を無視していると言わざるを得ない。泉井（1975）は単系説では埒のあかない言語の形成を説明するために基層・表層という基準を導入し重層語 (language of double layer/langue à double couche) という概念で説明しようとした。Meilletは基層 (substrat) という用語は用いるが、重層語という説明はしない。とくに、ミクロネシアの言語、パラオ語、チャモロ語に顕著に現れる多重対応を説明する方法が求められる。チャモロ語において祖語音 $*l(=*r)$ は (‘=?’) または l として多重的に語中で現れ、オーストロネシア語的古

層で声門閉鎖音²、インドネシア語的（二次的）新層で l となる。この言語的層（Schicht）の存在は H. Costenoble (*Die Chamorro Sprache*, 1940) が指摘し、泉井もそれを認めている。また泉井 (1955a) は、パラオ語における *t' (= *s) は t/d, s となる多重性に対して t/d は古層（メラネシア語的層）、s は新層（インドネシア語的層）に由来するとみなす。ただし、K. Pätzold (*Die Palau-Sprache*, 1968) はパラオ語の *t' の変化は t のみで、s という変化は示していない。s になるのは逆行同化による場合で、Dyen (*JPS* 80, 1971) はこの説明を ‘keen observation’ という。

泉井 (1965) は、ミクロネシアで話される諸言語を系統分類する以前の問題として各言語が形成される過程において基礎的言語層（underlying linguistic unity）が存在したと推定し、それが全域の言語に音韻的形態的な影響を与えたと見る。崎山 (1989) はチャモロ語 gw- とパラオ語 ng- の非オーストロネシア語的な対応を基層言語の影響とみなし、そのような先住民族語の存在を支持する。泉井 (1941) は、ミクロネシアにおける各言語の形成過程と分布を論じた重厚な論文で、現在もその価値を失わない。また泉井 (1949) は、チャム語もオーストロアジア語的な基層語のうえに上層語としてインドネシア語派的な要素をもつ重層語であるとみなす。しかし、このような重層説でも系統的にはチャム語はオーストロアジア語系となる。この見解はチャム語の系統を Malayo-Chamic とする現在の説と一致しない。

3.3. 地域的祖語

泉井は Dempwolff の先駆的比較研究 (*Vergleichende Lautlehre*, 1934-1938) がそうであったように方法論的にオーストロネシア祖語 (= マライ・ポリネシア祖語) というレベルしか認めなかったが、現在、オーストロネシア語族には下位の祖語群を再構成するのが潮流になっている。とくに年代が経過する過程において共通の文化を持つ地域が形成され、またそこで特徴的な言語変化と地域的な祖語形が発生したと考えることは言語の歴史において大いにあり得ることである。オーストロネシア言語学において地域的（二次的）祖語という発想が現れるのは、数千年の歴史を持つ言語史において当然考えられることで、その下位群は民族移動史において形成された言語文化圏の節目節目をも表しているのである。

崎山 (1980) はミクロネシア祖語 (Proto-Micronesian) の概念を発表したが、比較言語学的に具体的理由があったためである。とくにミクロネシアの場合、人々の移動、移住は複雑に行われたが、Blust (*JPS* 93 [2], 1984) もメラネシア・ソロモン諸島のマライタ語とミクロネシア語の共通祖語のレベルを提唱している。泉井 (1965) は ‘pan-Micronesian’ という概念で「ミクロネシア全体の言語において同じ起源をもつ語」という説明をするが、pan- は借用語なのか、proto のレベルでないとしたらどのような性格をもつのか明らかにしていない。

3.4. 日本語との系統関係

泉井がオーストロネシア語族と日本語との関係を具体的に論じた論文で「日本語と南島諸語—系譜関係か、寄与の関係か」（1953）が重要である。しかし、再録稿（1975）ではタイトルの副題が「語彙的寄与の関係か」と改められたうえ結語には大きな書き換えが見られ、一層慎重になっていることが窺える。泉井はその関係について「マライ・ポリネシア諸語の日本語に対する系譜関係について対応の規則性らしいものも現れてくる。しかし、それはどこまでも語彙的事実であって日本語の文法的機能と体系に有機的に関与しているものではない。（中略）マライ・ポリネシア語で活発に働いてきた（接頭辞の）鼻音現象が日本語に生きて働いた形跡もなければ、接辞法も日本語の文法にならびに語彙的派生に関与的に働いたこともない」と述べる。泉井は、日本語の場合もその形成において基層語としてのマライ・ポリネシア諸語の古い要素の存在を認めつつもこの基層語は北方的（大陸的）な言語的統一に服した異系の要素の一つとし、日本語は北方系とみる。やはり系統は単系なのである。ただし、鼻音現象も接辞法も紀元前二千年以降にマライ・ポリネシア祖語から分かれたオセアニア祖語においてすでに消滅するか弱体化していたことが明らかで、フィリピン方面から日本列島への民族移動は最も早く縄文時代後期と特定し得る。日本語における語根の開音節化現象もこのオセアニア祖語分化前後の状態を継承すると考えられる（崎山2012a）。日本列島に移住した最も遅い南方系民族は薩摩の隼人であった。古称はハキト [fayi-tō]、ハヤトはむしろ新形で国語学の説明は逆である。上代日本語のマライ・ポリネシア系語彙目録から *paRi+*taw は「南（=鱒 [エイ]、南十字星）の人」を意味した。

なお、Blust (*The Austronesian languages*, rev. ed. 2013) は Austro-Japanese (項目10.2.5.) において van H. Labberton (*JPS* 33, 1924)、Kawamoto (1977, 1984)、P. K. Benedict (*Japanese/Austro-Tai*, 1990) から「変な語彙」の比較を 'look-alike' として批判するが、「的外れな」Labberton説（村山・大林 1973）および祖語の次元が全く異なる Benedict のオーストロ・タイ大語族説（タイ・カダイ諸語のほか日本語を含む）を同列に引用する荒さは理解し難い。また、根からのオーストロネシア語族系統否定論の日本語研究者 A. Vovin (*OL* 33, 1994) に荷担するのみで、Murayama (1976)、村山 (1979)、板橋 (2000a, 2000b, 2001)、Itabashi (2003)、崎山 (1999)、Sakiyama (1996, 1998, 2000) らの混合説を悉く無視する。Blust は混合語否定論者？先入観は論外として、単に 'look-alike' かそうでない（すなわち系統的關係がある）かを判断するのが比較研究である。方法論的に、オーストロネシア祖語と古代日本語との音韻対応は言うまでもなく、意味変化についても民俗知識に基づいた検証により多くの語源が明らかにされつつある（崎山 2012a）。

4. 対照言語学

日本語との対照言語学的視点で編まれた講座に『講座日本語学 外国語との対照』があり崎山も編集委員として参加した。インドネシア語との対照では複数の執筆者（佐々木重次、柴田紀男、正保勇、スディアルタ）に依頼したが、崎山（1982）が最多の項目を担当した。また国研が編集刊行した『基礎日本語活用辞典』（1988）は対照言語学的なユニークな試みであり、日本語学者の作成した現代日本語の文例に基づいて複数のインドネシア語学者（崎山もメンバーに加わった）が翻訳文を作成し校閲したもの。見出し項目は約三千と少ないものの各項目は従来の日本語辞典で看過されていた基本的な用例を多く含む。商業出版でないことが遺憾であったが、現在、オンライン上で利用できるようになったことは喜ばしい（<http://dbms.ninjal.ac.jp/nknet/kamus/>）。その他、対照研究では神大総合人間科学研究科で湯淺（2002）がインドネシア語の態で博士（学術）を取得している。

戦時中の軍務とはいえ、わずか三ヶ月で印刷刊行されたインディアペーパーで千二百頁に及ぶマレー語辞典（武富 1942）は百科事典的説明を含む項目が多く現在も役立つ場合がある。しかし、生物名の同定や学名を欠き地方語がランダムに見出し語に出ているなど問題点もあり、語彙項目でも現代語辞典としての使用に耐えない。なお、オーストロネシア比較言語学では依然としてR.J. Wilkinsonの*A Malay-English dictionary*（1932 Mytilene, Greece）が必携であるが、現在、市場に流布するのは皮肉にも同時期の復刻版（1943 東京：大東亜出版）である。なお、佐々木重次は1994年来、日進月歩するインドネシア語の語彙、用法の最新情報を自らのホームページ（Sanggar Bahasa Indonesia「インドネシア語の中庭」）で毎週更新している（<http://homepages3.nifty.com/sanggar/newpages1/htm>）。

5. 社会言語学・言語人類学

戦前から現在までマレー語、インドネシア語、マレーシア語の入門書や会話書は多くあるが、披見の及ぶ限り‘full-scale’なレファレンスグラマーはいまだ書かれていない。マレー語は、インドネシア、マレーシアにおける多言語多民族社会においてリングフランカとして使用されるためいくつかの変種がある。当然、社会言語学的対象となるが、これについての研究もほとんど見かけない。ただし、竹井（1933）は主として華僑との間で用いられる文法と会話（Baba Malay、クリオール的一种）を中心とした内容で書名の馬來語は誤解を招くがその資料的価値はある。同様の会話書が明治末期に刊行されていることは上に述べた。変種マレー語としてHosokawa（1987）はオーストラリア西部のアラフラ海で発生したPidginの報告をしている。またオセアニアのトクピシン研究については本誌の岡村稿を参照。

人類学的研究では、上述した阿良田のスダの食文化研究、原のバリにおけるコード混在のほか、森口（1979）のフィリピンにおけるタガログ語のコードスイッチングの分析、阪大言語文化研究科では藤原（2004）がインドネシア語の「断り」の会話分析で博士（言語文化学）を取得した。片桐（2003）は台湾原住民諸語における言語的共生の研究である。なお、オーストロネシア諸語の「情報構造」に関する国際ワークショップの成果が2014年、ILCAAから刊行された。ただし、この報告にパプア諸語のAmeleが混入している理由は不明。崎山（1993）は文法書では言及されないマレー語の口語的文末詞（日本語「ね、さ、よ」の類）の研究である。また女性語について土田（1993）がアタヤル語の事例を報告している。類型論ではTagalog（フィリピン）についてHirano（2012）の記述した文法がアメリカで数多く刊行されている文法書に比肩し得る。またMinouraにはマダガスカルにおける手話研究のほかMalagasyの動詞句の類型論的研究（2013）がある。

自然認識については、Tsuchida（1977）が台湾諸語における植物名、Yamada（1995b）がItbayatの魚名、Tsuchida（1984a）がYamiの魚名、Yamada/Nik（1999）がMalay（マレーシア）Kota Bharu方言の魚名、上述したKikusawaのFijianの海生動物、菊澤（2003）がオセアニアのタロの名称、さらにニューギニアではAkimichi/Sakiyama（1991）のManusの魚名の研究がある。マダガスカルの植物名では崎山（2009）、マダガスカルの魚名ではマライ・ポリネシア祖語および新たに再構成したヌサンタラ祖語（Proto Nusantaran）から意味変化を考慮し分析した崎山（2012b）がある。空間認識に関してツツバ語の研究で内藤（2011b）には日本言語学会論文賞が授与された。

言語接触についてはオーストロネシア諸語とパプア諸語を崎山（1986）、またOsumi（2012）がTinrinとNekuの所有表現の接触を論じている。高殿（1985）のインドネシアの諸民族（四言語）における親族名称と親族呼称の研究は言語寄りではあるが人類学にも寄与する。なお、音楽学の論文で山口（1985）のベラウ（パラオ）語の歌謡の歌詞の分析、人類学では吉田（1979）のトバ・バタック人（スマトラ）の病気と病名、薬草学では高橋（1988）のジャワの植物生薬（ジャワ語jamu）の研究はいずれもフィールドワークに基づき、言語研究にも貴重な情報となる。

6. 古資料研究

東南アジア島嶼部の西部マライ・ポリネシア諸語域におけるインド系文字の系統と歴史は青山（2002）がまとめている。また明代の中国で周辺諸国間との通事養成のため編集された『華夷譯語』のうち、いわゆる丙種本には『満刺加館譯語』（マラッカ王国語）、『占城國譯語』（チャンパ王国語）が含まれそれぞれ、崎山（1968）、川本（1989）の研究がある。その後、清

代に作成された『華夷譯語』（ケンブリッジ大・ウェードコレクション）には『蘇祿譯語』（フィリピン南西部のスルー王国語）が含まれることを西田龍雄が『多續譯語の研究』（1973）の中で紹介している。その他、ローマ字で書かれた言語資料として台湾ではオランダ時代（1624-1661）に普及した土地貸借証文（新港文書とも呼ばれ、一時は絶滅したシラヤ語の資料）の一部がMurakami（1933）により翻訳された。またシラヤ語の人称代名詞について土田（1996）の研究がある。パラオでは、1783年、環礁で座礁した英国船アンテロープ号の修復後、教育のためロンドンに同伴した首長の息子Lee BooからG. Keate（1788）が聴き取ったPalauanの研究（Sakiyama 1995）がある。なお、ミクロネシアで二十世紀初めに出現し未発達のまま滅んだWoleai（Caroline）文字についてRiesenberg/Kaneshiro（1960）の現地調査に基づく詳細な研究がある。

7. 危機言語研究

1999-2002年の三年半、文部科学省の科学研究費特定領域研究「環太平洋の＜危機に瀕した言語＞にかんする緊急調査研究（Endangered Languages of the Pacific Rim, 略称ELPR）」（代表・宮岡伯人）が実施され、その成果刊行物は総冊数120点（実刊数124点）に達した。成果一覧は（<http://lingdy.aacore.jp/jp/elpr/elpr.html>）、またダウンロードには（<http://repository.tufts.ac.jp/handle/10108/>）を参照。本研究の英語版はOUPからMiyaoaka/Sakiyama/Krauss編（2007）で刊行され、Tsuchidaが台湾における調査研究の現状、SakiyamaがMalayo-Polynesianの現状を執筆した。なお、崎山（2003a）はELPRを補充すべく民博で行った共同研究の成果である。シリーズのうちSakiyama（2003b, ELPR C-006）はミクロネシアのNgluwanの言語混合、セラム（マルク）のFatamanue（Haruru方言）の重層性、琉球Tarama-jima/Minna-jima（多良間島・水納島）方言の音韻体系、その他の論攷をまとめたもの。また1996年、フィリピン大Ph.D.論文となったAkamine（2003）のSinama（フィリピン）のスケッチもELPRに入った。

本特定領域研究で刊行された言語のうちオーストロネシア語族でとくに危機的な状態にあるのは、ミクロネシアのNgluwan（Sakiyama, C-006）、台湾のKanakanavu（Tsuchida, A3-014）、インドネシア・スラウェシ中部のTopoiyo（Yamaguchi dll., A3-009）、ポリネシア・クックのPenrhyn（Shibata, A1-005）である。Ngluwanは数十名、Kanakanavuは数名、Topoiyoは数百名、Penrhynは二百名でいずれも‘moribund’の状態にあり、周辺の優勢言語への乗り換えが著しく絶滅寸前である。また上に述べた言語のなかでは、ミクロネシアのPulo Annianは数名、ニューカレドニアのTinrin、オロエ語、Païta、ヴァヌアツのツツバ語はいずれも数百名で、ミクロネシアでは絶滅寸前、ニューカレドニア・ヴァヌアツでは一次話者の減少が続

いている。なお、OsumiはニューカレドニアのNeku保全のためCD付き学習用絵本（2011）を刊行し、文字化（分音符号付きローマ字表記）方式を提案した。

8. NUSAの国内刊行

言語学雑誌NUSA（: Linguistic Studies of Languages in and around Indonesia）はJohn W.M. Verhaarにより1975年に創刊され、1982年からはアトマジャヤ・カトリク大（インドネシア）とNUSA編集委員会の共同刊行として年二回刊行されてきた。対象はインドネシアの言語の研究論文が中心であるが、近隣の言語の研究も投稿できる。当然、パプア州や東側のパプアニューギニア国のパプア諸語、オーストロネシア語族域が含まれる。東京外大AA研のホームページでは、この出版刊行が2012年（?）からAA研との共同事業となり、AA研がオープンアクセスの電子ジャーナルを、アトマジャヤ大が冊子体を分担刊行するという。最新の2014年56号は「ダイクシス」特集で国内の投稿者はK. Inagaki（稲垣）、A. Utsumi（内海）、A. Shiohara（塩原）、オーストロネシア諸語はそれぞれ、Kadorih, Bantik, Sumbawaで論文は下記のホームページを参照。なお、NUSAのホームページ（29/1/2013）では提携相手をTokyo UniversityとしTUと共同でオンライン版と印刷物を出すとある。原文は次のとおり。

NUSA adalah sebuah terbitan internasional yang merupakan Seri mengenai bahasa Indonesia dan bahasa-bahasa Nusantara. Seri NUSA terbit pertama kali tahun 1975, dan mulai dikelola oleh LBA (kini PKBB) sejak tahun 1982 sampai sekarang. Tahun 2013 ini juga merupakan tahun kembalinya Jurnal NUSA yang terbit dalam versi online (<http://www.aa.tufs.ac.jp/en/publications/nusa>) dan cetak berkat kerja sama dengan Tokyo University. (<http://www.atmajaya.ac.id/web/KontenUnit.aspx?gid=publikasi-unit&ou=pkbb&cid=penerbitan-jurnal-nusa>)

日本人による研究文献抄（A selected list of works by the Japanese）

Akamine, Jun (2003) *A basic grammar of Southern Sinama*. Osaka: ELPR A3-012.

Akimichi, Tomoya and Sakiyama, Osamu (1991) Manus fish names. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 16(1) : 1-29.

青山 亨 (2002) 「東南アジア島嶼部におけるインド系文字」『上智アジア学』20 : 11-23.

阿良田麻里子 (2005) 『インドネシア・スダの食文化——言語人類学的観点から』総合研究大学院大学学位論文.

Asai, Erin (1936) *A study of the Yami language, an Indonesian language spoken on Botel Tobago*

- Island*. Leiden: J. Ginesberg.
- 浅井恵倫・小川尚義 (1935, 再版1967) 『原語による台湾高砂族伝説集』 東京：刀江書院。
- 藤原智栄美 (2004) 『日本語話者とインドネシア語話者の「断り」に関する研究』 大阪大学学位論文。
- Goodenough, Ward H. and Sugita, Hiroshi (1980) *Trukese-English dictionary*. Memoirs of the American Philosophical Society, 141. Philadelphia: American Philosophical Society.
- Goodenough, Ward H. and Sugita, Hiroshi (1990) *Supplementary volume: English-Trukese and index of Trukese word roots*. Memoirs of the American Philosophical Society, 141S.
- 原真由子 (2008) 『バリ語とインドネシア語のコード混在』 東京外国語大学学位論文。
- Hirano, Takanori (2012) *Tagalog grammar. A typological perspective*. Tokyo: Hituzi Syobo.
- Hosokawa, Komei (1987) Malay talk on boat: An account of the Broome Pearling Lugger Pidgin. In D. Laycock and W. Winter (eds.) *A World of Language: Papers Presented to S. A. Wurm on His 65th Birthday*, 287-296. Canberra: PL C-100.
- ILCAA (2014) *Proceedings of the International Workshop on Information Structure of Austronesian Languages*. Linguistic Dynamics Science Project 2. Tokyo.
- Imanishi, Kazuhiro (2009) Nominal marking and pronominal system in Amis. *TULIP* 28:89-115.
- Imanishi, Kazuhiro (2010) Various types of linking and related constructions in Amis. *LLO* 2:33-56.
- 稲垣和也 (2008) 『カドリ語——ボルネオ島のオーストロネシア系言語の記述』 京都大学学位論文。
- 板橋義三 (2000a) 「古代日本語とオーストロネシア諸言語における一形態の同源性：その2」 『言語文化論究』 11:165-190. 九州大学言語文化部。
- 板橋義三 (2000b) 「古代日本語とオーストロネシア諸言語における一形態の同源性：その3」 『言語科学』 35:47-64. 九州大学言語文化部。
- 板橋義三 (2001) 「古代日本語とオーストロネシア諸言語における一形態の同源性：その1」 『比較社会文化』 7:57-68. 九州大学大学院比較社会文化研究科。
- Itabashi, Yoshizo (2003) Altaic and Austronesian language mixing in Old Japanese: Evidence of core basic vocabulary and affixes. *Urasian Studies Yearbook* 75:6-58.
- 泉井久之助 (1941) 「ミクロネシア諸言語の構造的種々性について」 『マ・ポ諸語』 130-150.
- 泉井久之助 (1949) 「南ヴェトナムにおけるチャム語の系統」 『マ・ポ諸語』 174-208.
- 泉井久之助 (1953) 「日本語と南島書語——系譜関係か、寄与の関係か」 『マ・ポ諸語』 210-238.

- 泉井久之助 (1955a) 「マライ・ポリネシア諸語」『マ・ポ諸語』2-104.
- 泉井久之助 (1955b) 「比較言語学における共通音韻定立の限界——マライ・ポリネシア語における *y について」『マ・ポ諸語』222-231.
- Izui, Hisanosuke (1965) A genealogical and typological survey of the languages of Micronesia. In E. J. A. Henderson and G.B. Milner (eds.) *Conference on Linguistics Problem of the Indo-Pacific Area*. Amsterdam: North-Holland Pub. Co. (Reprinted in Izui (1970), *Gengo no Sekai*, 415-426. Tokyo: Chikuma Shobo.)
- 泉井久之助 (1975) 『マライ・ポリネシア諸語——比較と系統』東京:弘文堂. (『マ・ポ諸語』と略)
- 片桐真澄 (2003) 「台湾原住民諸語を巡る諸問題と言語的共生への方策」『文化共生学研究』1(1): 93-106.
- 川本邦衛 (1989) 「「占城国訳語」の成立——明代言語資料の側面についての覚書」『藝文研究』54: 313-331.
- Kawamoto, Takao (1977) Toward a comparative Japanese-Austronesian I. *Bulletin of Nara University of Education* 26(1): 23-49.
- Kawamaoto, Takao (1984) Two sets of sound laws between Japanese and Austronesian. *Bulletin of Jōetsu University of Education* 3: 31-50.
- Kikusawa, Ritsuko (1995) Names of marine animals in the Wailevu communalect, Kadavu, Fiji: An interim report. Festschrift for Professor TSUCHIDA Shigeru. *TULIP* 14: 699-736.
- Kikusawa, Ritsuko (2002) *Proto Central Pacific ergativity: Its reconstruction and development in the Fijian, Rotuman and Polynesian languages*. Canberra: PL-520.
- 菊澤律子 (2003) 「オセアニアのタロ——名称にもとづく系譜の特定」吉田集而・堀田満・印東道子 (編) 『イモとヒト: 人類の生存を支えた根栽農耕——その起源と展開』53-76. 東京: 平凡社.
- Kitano, Hiroaki (2008) *Ergativity and transitivity in Kapampangan: Clitics, categoriality and complex constructions*. Ph.D. thesis. Tohoku University.
- 国立国語研究所編 (1988) 『基礎日本語活用辞典: インドネシア語版』(*Kamus Pemakaian Bahasa Jepang Dasar: Edisi Bahasa Indonesia*) 国立国語研究所.
- Kurokawa, Hiroshi (1985) A concise description of the basic structures of the Malagasy language. *Reitaku University Journal* 40: 233-275.
- Li, P. Jen-kuei (李壬癸) (2007) 「日本學者對於台灣南島語言研究的貢獻」(<http://www.ntcu.edu.tw/taiwanese/ogawa100/a/tsuliau/3>.)
- Li, P. Jen-kuei (李壬癸) (ed.) (2003) *English-Favorlang vocabulary by Naoyoshi OGAWA*. Asian

- and African Lexicon 43. ILCAA.
- Li, P. Jen-kuei (李壬癸) and Toyoshima, Masayuki (2006) (eds.) 『臺灣蕃語蒐録 by 小川尚義』 Asian and African Lexicon 49. ILCAA.
- 林 初梅編 (2012 復刻版) 『小川尚義論文集——日本統治時代における台湾諸言語研究』 東京：三元社.
- Matsumoto, Kazuko (2001) *Language contact and change in Micronesia: Evidence from the multilingual Republic of Palau*. Ph.D. thesis. University of Essex, Colchester, U.K.
- Minoura, Nobukatsu (2013) Event integration patterns in Malagasy. *Area and Culture Studies* 86: 63-86. Tokyo University of Foreign Studies.
- Miyake, Yoshimi (2011) Reduplication in Javanese. *Asian and African Languages and Linguistics* 6: 45-59. ILCAA.
- Miyake, Yoshimi (2014) The information structure of Javanese narratives. *Proceedings of the International Workshop on Information Structure of Austronesian Languages* 113-127. ILCAA .
- Miyaoka, Osahito, Osamu Sakiyama, and Michael E. Krauss (eds.) (2007) *The vanishing languages of the Pacific rim*. London: OUP.
- 森口恒一 (1979) 「多言語使用とコード・スイッチング——とくにフィリピンの事例分析をもとに」 谷泰編 『人類学の方法論の研究』 341-405. 京都大学人文科学研究所.
- Moriguchi, Tsunekazu (1995) Linguistic and anthropological analysis of avoidance in Bunun, Taiwan. *Festschrift for Professor TSUCHIDA Shigeru. TULIP* 14: 23-48.
- 森口恒一 (編) (1998) 『伊能嘉矩蕃語調査ノート』 台北：南天書局・東京：風響社.
- Murakami, Naojiro (1933) Sinkan manuscripts. *Memoirs of the Faculty of Literature and Politics, Taihoku Imperial University* 2(1).
- Murayama, Shichiro (1976) The Malayo-Polynesian component in the Japanese language. *Journal of Japanese Studies* 2: 413-436.
- 村山七郎 (1979) 『日本語の誕生』 東京：筑摩書房.
- 村山七郎・大林太良 (1973) 『日本語の起源』 東京：弘文堂.
- 内藤真帆 (2011a) 『ツツバ語 記述言語学的研究』 京都大学学術出版会.
- 内藤真帆 (2011b) 「ツツバ語 (ヴェヌアツ) の移動動詞と空間分割」 『言語研究』 136: 153-176.
- Nagaya, Naonori (2012) *The Lamaholot Language of Eastern Indonesia*. Ph.D. thesis. Rice University, Houston, Texas.
- 仁平芳郎編著 (1976) 『古代インドネシア語音韻ノート：小川尚義論文集』 東京：アド・インスチテュート.

- Nihira, Yoshiro (1988) *A Bunun vocabulary: A language of Formosa*. Tokyo: Ad-In KK.
- Nishiyama, Kunio and Herman Kelen (2007) *A grammar of Lamaholot, Eastern Indonesia: The morphology and syntax of the Lewoingu Dialect*. München: Lincom Europa.
- Nojima, Motoyasu (1995) Voice in Bunun. Festschrift for Professor TSUCHIDA Shigeru. *TULIP* 14: 743-758.
- Nomoto, Hiroki (2013) On the optionality of grammatical markers: A case study of voice marking in Malay/Indonesian. *NUSA* 54: 123-145.
- 小田真弘 (2000) 『小田真弘著作集』岡山大学文学部言語学研究室.
- Oda, Sachiko (1977) *The Syntax of Pulo Annian*. Ph.D. dissertation, University of Hawaii.
- 小川尚義 (1930) 『パイワン語集』臺灣総督府.
- 小川尚義 (1931) 『アタヤル語集』臺灣総督府.
- 小川尚義 (1933) 『アミ語集』臺灣総督府.
- Osumi, Midori (1995) *Tinrin grammar*. Oceanic Linguistics Special Publication 25. University of Hawaii Press.
- Osumi, Midori (texte) et Boston Abe (illustrations) avec CD audio (2011) (ネク語・フランス語版) *Pourquoi les rats ont-ils des queues?* Tokyo: Fukuinkan Shoten.
- Osumi, Midori (2012) The semantic range of the Tinrin verb *fwi*, with reference to some related morphemes in Neku. *LLO* 4: 1-24.
- Riesenberg, Saul H. and Kaneshiro, Shigeru (1960) A Caroline Islands script. *Bureau of American Ethnology Bulletin* 173: 269-333. Washington DC: Smithsonian Institution.
- 崎山 理 (1968) 『『満刺加館訳語』について』『大阪外国語大学学報』20: 197-214.
- 崎山 理 (1974) 『南島語研究の諸問題』東京: 弘文堂.
- 崎山 理 (1980) 「ミクロネシア祖語の性質」『京都産業大学国際言語科学研究所所報』1(3): 146-156.
- 崎山 理 (1982) 「文の基本的構成」、「テンス・アスペクト」、「語彙」、「談話の構造」『講座日本語学10/11/12 外国語との対照 I/II/III』68-83/61-80, 103-118/199-215. 東京: 明治書院.
- 崎山 理 (1986) 「オーストロネシア語族とパプア諸語の言語接触——とくに語順変化について」『国立民族学博物館研究報告』11(2): 355-382.
- 崎山 理 (1989) 「チャモロ語・パラオ語の重層的特徴」牛島巖・中山和芳編『オセアニア基層社会の多様性と変容——ミクロネシアとその周辺』(国立民族学博物館研究報告別冊6) 231-240.
- 崎山 理 (1993) 「インドネシア語とインドネシアの諸言語における文末詞」藤原与一編『言

- 語類型論と文末詞』135-148. 東京：三弥井書店。
- Sakiyama, Osamu (1995) Decipherment and studies of early Palauan word-lists collected since the eighteenth century. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 20(1) : 1-48. (Reprinted in Sakiyama [2004], 121-203.)
- Sakiyama, Osamu (1996) Formation of the Japanese language in connection with Austronesian languages. In T. Akazawa and E.J.E. Szathmáry (eds.) *Prehistoric mongoloid dispersal*, 349-358. London: OUP.
- Sakiyama, Osamu (1998) Is Japanese an isolated, or Altaic language? In K. Omoto (ed.) *Interdisciplinary perspectives on the origins of the Japanese. International Research Symposium Proceedings* 11-B, 281-291. International Research Center for Japanese Studies, at Kyoto.
- 崎山 理 (1999) 「日本語の起源」佐原信・田中琢編『古代史の論点6 日本人の起源と地域性』179-196, 東京：小学館。
- Sakiyama, Osamu (2000) Austronesian languages as a genetic element of the Japanese language. Ms. Session 185. *2000 Annual Meeting*. Association for Asian Studies, at San Diego, CA.
- 崎山 理編 (2003a) 「太平洋地域における危機言語とその問題点」崎山理編『消滅の危機に瀕した言語の研究と現状の課題』(国立民族学博物館調査報告39) 7-15.
- Sakiyama, Osamu (2003b) *Studies of minority languages in the Western Pacific rim*. Osaka: ELPR C-006.
- Sakiyama, Osamu (2004) *Comparative and historical studies of Micronesian languages*. School of Human Cultures, University of Shiga Prefecture.
- Sakiyama, Osamu (2007) Languages of the Pacific region: Malayo-Polynesian. In O. Miyaoka, O. Sakiyama, and M. E. Krauss (eds.) *The vanishing languages of the Pacific rim*, 267-282. London: OUP.
- 崎山 理 (2009) 「マダガスカルにおけるオーストロネシア系言語由来の植物名称の意味変化」『国立民族学博物館研究報告』33(2) : 227-264.
- 崎山 理 (2012a) 「日本語の混合的特徴——オーストロネシア祖語から古代日本語へ音法則と意味変化」『国立民族学博物館研究報告』36(3) : 353-393.
- 崎山 理 (2012b) 「マダガスカルのオーストロネシア系魚名」飯田卓編『マダガスカル地域文化の動態』(国立民族学博物館調査報告103) 209-240.
- Sato, Hiroko (2013) *Grammar of Kove: An Austronesian language of the West New Britain Province, Papua New Guinea*. Ph.D. dissertation, University of Hawaii.
- Shibata, Norio (2003) *Penrhyn-English dictionary*. Osaka: ELPR A1-005.

- 新谷忠彦 (1981) 『ラデ語－ベトナム語－日本語語彙』 (アジア・アフリカ基礎語彙集12) 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- Shintani, Tadahiko et Païta Yvonne (1990) *Dictionnaire de la langue de Païta*. Publications de la société d'études historiques de la Nouvelle-Calédonie 43.
- Shintani, Tadahiko et Païta Yvonne (1990) *Grammaire de la langue de Païta*. Publications de la société d'études historiques de la Nouvelle-Calédonie 44.
- 塩原朝子 (2006) 『スンバワ語の文法』 東京大学学位論文.
- 塩谷 亨 (2007) 「ポリネシア諸語の比較表現における方向詞」『室蘭工業大紀要』 57 : 17-24.
- 塩谷 亨 (2009) 「ハワイ語の感情を表わす状態動詞の叙述用法と限定用法」『北海道言語文化研究』 7 : 135-146.
- Sugita, Hiroshi (1987) *A study of Trukese possessive expressions*. Ph.D.dissertation. University of Hawaii.
- 高殿良博 (1985) 「インドネシアにおける親族名称と親族呼称をめぐって——インドネシア語、アチェ語、バタック語およびミナンカバウ語の場合」『亜細亜大学アジア研究所紀要』 12 : 125-162.
- 高橋澄子 (1988) 『ジャムウ インドネシアの伝統的治療薬』 東京 : 平河出版社.
- 竹井十郎 (1933) 『最新馬來語讀本』 東京 : 日本植民通信社.
- 武富正一 (1942) 『馬來語大辭典』 東京 : 旺文社.
- Tsuchida, Shigeru (1976) *Reconstruction of Proto-Tsouic phonology*. Monograph Series 6. ILCAA.
- Tsuchida, Shigeru (1977) Some plant names in Formosan languages. *Computational Analyses of Asian & African Languages* 7 : 79-119. ILCAA.
- Tsuchida, Shigeru (1984a) Fish names in Yami (Imorod dialect) : Second interim report. *TULIP* 5 : 11-90.
- 土田 滋 (1984b) 「人と学問 浅井恵倫」『社会人類学年報』 10 : 1-28.
- 土田 滋 (1993) 「世界の女性語 アタヤル語」『日本語学』 臨時増刊号12 (6) : 28-32.
- 土田 滋 (1996) 「シラヤ語人称代名詞」『台湾原住民研究』 1 : 132-157.
- Tsuchida, Shigeru (2003) *Kanakanavu texts (Austronesian Formosan)*. Osaka: ELPR A3-014.
- 土田 滋 (代表) 三尾裕子・豊島正之 (編) (2005) 『小川尚義・浅井恵倫台湾資料研究』 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- Tsuchida, Shigeru (2007) Indigenous languages of Formosa. In O. Miyaoaka, O. Sakiyama, and M. E. Krauss (eds.) *The vanishing languages of the Pacific rim*, 285-300. London: OUP.
- 辻 笑子 (2011) 『オロエ語 (ニューカレドニア) の文法記述』 東京大学学位論文.

- Tsukamoto, Akihisa (1988) *The language of Niuafo'ou Island*. Ph.D. thesis. The Australian National University, Canberra.
- Tsukamoto, Akihisa (1994) *Forschungen über die Sprachen der Inseln zwischen Tonga und Saamoa*. Austronesiana: Studien zum austronesischen und Ozeanien, Bd. 2. Münster/Hamburg: Lit.
- 月田尚美 (2009) 『セデック語 (台湾) の文法』 東京大学学位論文.
- 内海敦子 (2005) 『バンティック語の構造と接辞の意味・機能』 東京大学学位論文.
- 鶴沢洋志 (2007) 『マレーシア語の文型に関する研究』 東京外国語大学学位論文.
- Yamada, Yukihiro (1995a) Itbayat and word order typology. Festschrift for Professor TSUCHIDA Shigeru. *TULIP* 14:3-22.
- Yamada, Yukihiro (1995b) *Fish names in Itbayat, Philippines*. Himeji Dokkyo University.
- Yamada, Yukihiro and Nik Abdul Malek Faisal (1999) *Fish names in Kota Bharu*. Himeji Dokkyo University.
- Yamada, Yukihiro (2014) *A grammar of the Itbayat language of the Philippines*. Himeji: Private Ed.
- Yamaguchi, Masao (1999) *Kedudukan bahasa Mamuju secara genealogis dalam kelompok bahasa Sulawesi Selatan*. Disertasi Program Pascasarjana. Universitas Hasanuddin, Makassar.
- Yamaguchi, Masao, Hirotake Nakashima, dan Nurhayati (2002) *Kosakata dasar bahasa Topoiyo serta tata bahasa ringkas bahasa Topoiyo*. Osaka: ELPR A3-009.
- 山口 修 (1985) 「ミクロネシア・ベラウ歌謡歌詞集成——1965-1966年の民族音楽学的フィールドワークの記録 (I)」『大阪大学文学部紀要』 25: 87-309.
- 楊光 (Yo-keo) (1908) *Bahasa China-Japan dan Java*. 東京: 國語研究社・爪哇: 楊海泉藥房.
- 吉田集而 (1979) 「トバ・バタック族における病気の民俗分類」『国立民族学博物館研究報告』 3(3): 416-464.
- 湯浅章子 (2002) 『日本語、インドネシア語における態と他動性』 神戸大学学位論文.